

TS（トータル・サティスファクション）を目指して③「リスペクトの心」

「人と自分を大切に想っていますか？」

校長室担当より

私は、「リスペクト (respect)」という言葉が好きで、いつも意識して使っています。この日本語の「尊敬する」という意味とは少し異なると考えています。日本語の「尊敬する」にはなぜか「立場が下の者が上の者を崇める。」というニュアンスが残ります。ところが、英語の respect という言葉には上下関係はありません。ちなみに、日本サッカー協会はこの言葉の意味を、「取り巻く人や物、環境、思想、価値観など関わるすべてのものを大切に思う」こととしています。これがこの学校の目指す「トータル・サティスファクション」の土台となる「信頼」を生み出す手段となります。

今日は、日本サッカー協会のサイトから、2つお話を紹介します。どちらもサッカージャーナリストの大住良之さんのお話です。(JFA NEWS 「いつも心にリスペクト」より引用)

2012年9月イタリアセリエAの試合のことだ。クローゼ（というサッカー選手）がゴールを決めた。しかし、ゴールのホイッスルが鳴り、狂喜する味方の選手祝福の中から彼は出てきて、審判に自ら近寄り、「僕の手に当たり、ゴールに入った。」と告げた。試合後、「テレビの前で、多くの少年少女が見ている。僕たちは彼らに手本を示す責任がある。」とクローゼは笑顔も見せずにそう話した。こうしたクローゼの行動の背景に何があるのか、私はずっと考えてきた。自分の手に当たってゴールに入っても、サッカー選手の大半は「レフェリーがゴールといえばゴール。」と口をつぐんでしまうに違いない。多くのサッカーファンも、そうした行為を当然のことと考えているだろう。しかし、クローゼは、チームの利益を放棄することを知りつつ正直に話した。(中略)クローゼは自らを誇りにできる人間でありたかった。それは「自分自身に対するリスペクト」と呼ぶべきものだ。他者に対してのリスペクトの心、大切に想う心をもつためには、その前提として自分自身を大切に想う「セルフ・リスペクト」が必要なはずだ。自分自身を大切にすることから、当然、同じように想っている他者を大切にすること。日本の少年少女や若い選手たちにも、そうした心のプロセスを働きかけていかなければならないと思う。

VAR に代表される監視システムにより、こういう感動的な姿勢に光が当たることは少なくなるのかもしれませんがね。次も大住さんの話です。

どうしたら子どもたちが「リスペクトの心」をもてるようになるのでしょうか。難しそうですが、そのプロセスは実際には非常にシンプルではないかと私は思っています。子どもたちに対して、周囲のすべての大人たちが「リスペクトの心」をもって接することです。

私の友人に、誰に対しても驚くほど親切な友人がいます。どんなときにも彼は自分のためではなく、相手のためにどうしたらいいかを考えて行動します。まるで聖人のような人なのですが、長い間、彼の人格がどうやって形成されたのか不思議でなりません。そしてあるとき、彼の両親に会って、その謎は簡単に解けました。彼は両親から、そしておそらくすべての家族から無条件の愛を注がれて育ったのです。甘やかされたという意味ではありません。ほめる時だけでなく、叱る時もあったでしょう。しかし、そのすべての背後に無償の愛があることを彼は感じながら育ったのです。他人に対して時に無私の親切ができる人間になったのです。リスペクトも全く同じではないでしょうか。親から子どもへ、指導者から選手へ、運営役員から選手へ、特に重要なのは学校の先生から生徒へ……。

この2つの話からわかるように、身近に存在する私たち大人がまず範を垂れることが非常に重要です。私たちは常に子どもたちから見られています。でも人に見られていようが見られていまいが、常に他者に対して「リスペクトの心」をもって対等に接することができれば、彼らは自然に「リスペクトの心」をもつようになるに違いありません。あのドラッカーもこう言っています。「人間関係はリスペクトに基礎をおかなければならない」と。私たちには身をもってそれを伝える責任があります。(令和3年5月28日)

本校教職員として目指す方向性(確認) ※4月1日にお願ひしたこと

- 1 トータル・サティスファクションの実現
- 2 学びに向かう力をもつモデルを率先垂範
- 3 対話とパートナーシップに基づく行動
- 4 全教職員で全校の児童生徒を見守るチームの実現
- 5 「今さえ、ここさえ、自分さえよければいい」の3悪の撲滅